

# 園長先生の子育てひろば

令和6年4月

園長 堀田 あけみ

春が来て新しい年度もやってきました。家族の生活では、あまり気にすることはありませんが、学校や多くの職場では4月1日になると、学年が変わったりお仕事が変わったりします。身が引き締まる思いをしたり、わくわくしたりすることも多いのではないのでしょうか。グローバル基準の9月に年度始めを移そうという議論はずいぶん前からありますが、やはり花いっぱい季節に新しい生活を始めるのはよいものだと思います。

幼稚園でも1学年お兄さん・お姉さんになった子どもたちが、晴れがましい顔で新入生をお迎えしています。お子さんの入園はうれしい反面、ご家庭で見ているときには気にならなかったことが気になり始めるきっかけにもなりますよね。

学年というのは不思議な概念で生まれたのが一日違いでも、学年をまたぐと「先輩・後輩」になって、それが一生続きます。5月生まれな上に大柄な長男は、近所の遊び相手が揃って一足先に幼稚園に入って、公園で寂しそうにしていました（因みに、その公園は椋山幼稚園のお隣、フェンス越しにお友達が見えてしまいます）。

その学年に助けられたのが知的障害を伴う自閉スペクトラムの次男です。4月9日生まれという学年で一番のお兄さんの彼は、やはりこちらの園でお世話になりましたが、先生方のサポートやお友達、保護者の皆さんに助けられて、3年間をととても楽しく過ごしました。様々なところで遅れが見られる彼が、もし4月3日の予定日より早く生まれてしまっていたら、これほどの適応は難しかったと思います。私などは、還暦祝いが一年早くとどいたところで、大した問題ではありませんが、小さい子どもにとって、月齢が36カ月か48カ月かは、とても大きな問題です。

そして、学年で区切られると、家族といるときには気にならなかった「あの子はできるのに、うちの子はできない」という感覚が芽生えてきます。ことばや運動能力だけでなく、コミュニケーションの面でも「友達と遊べない」「優しくないと、悩みの種はきりがありません。

もちろん、幼児期には社会性の土台が作られますから、不得手があれば伸ばすためのサポートは大切です。でも、「それは今、必要ですか？」と立ち止まることは必要です。それは、お子さんに必要なサポートでしょうか。もしかしたら、保護者さんの焦りではありませんか。

私は障害児の母でしたから（今は、障害者の家族です）、ときどき「うちの子は、『優しい子』のリトマス試験紙じゃないんだけどな」と思うことがありました。確かに優しくなければ、彼とうまくやっては行けませんが、逆は真ではないですよ。次男となかよくしているのは、彼と気が合うから。その辺は普通なんです。だから、攻撃的になられると辛いけど、無理して仲良しになることはないんです。

幼児の人間関係が大人の影響を受けてしまうのは、ある程度仕方ありません。でも、子ども達もなかなか優れたバランスで人間関係を構築しています。

来月は、そのお話です。

